

『ヴァジュラダーカ・タントラ』

第1, 7, 8, 14, 18, 22, 36, 38章 — 試訳

杉木 恒彦

本稿は筆者が以前『智山学報』(vol.51, p.(81)–(115), 2002年, およびvol.52, p.(53)–(106), 2003年)に掲載した“A Critical Study of the *Vajradākamahātantrarāja* (I) — Chapter.1 and 42 —” および“A Critical Study of the *Vajradākamahātantrarāja* (II) — Sacred Districts and Practices Concerned —”の中で提供した *Vajradākamahāyoginītantrarāja* (以下、『ヴァジュラダーカ・タントラ』)の第1, 7, 8, 14, 22, 36, 38章のサンスクリット語テキストの試訳である。様々な他文献に見られる、本テキストとパラレルになっている(あるいは関係の深い)箇所提示、本テキストの各章が持つ文献史上の位置、そしてそこに説かれる思想や儀礼の内容については、簡潔ではあるが上掲2つの論文の中で論じたので、くり返しを避け、『ヴァジュラダーカタントラ』を研究することの意義のみをここでは述べておきたい。

『ヴァジュラダーカ・タントラ』は、筆者が“チャクラサンヴァラ (*cakrasaṃvara*) 系”⁽¹⁾と呼ぶインド密教の一セクションに属する大部の經典の一つである。チャクラサンヴァラ系の密教は、それに属する文献群の多大な写本(およびチベット語訳文献)が現存していることから理解できるように、インド仏教・密教史における巨大な伝統の一つであった。インドで仏教が衰亡した後も、チャクラサンヴァラ系の密教は現在に至るまでネパールの伝統仏教であるネワール仏教の権威であり続け、またチベット仏教にも多大な影響を与えている。このように、インドのチャクラサンヴァラ系の密教の研究は、インド仏教史のみならず周辺諸国の仏教史の研究をも射程に含むものとなる。だが、チャクラサンヴァラ系の密教の本格的な研究は、その多くの重要文献が未校訂のままであることから理解できるように、まだ途に就いて間もないといった状況であり、その基本的な思想の全貌が明らかになっているとは言いがたい。

このようなチャクラサンヴァラ系の密教の中にあつて、本稿が扱う『ヴァジュラダーカ・タントラ』はわりに早い時期に廃れた經典であると推定できる。というのは、その現存写本はパームリーフのものが2本のみだからである(もし後代まで広く受容され続けたならば、多数の紙写本が現存して然るべきである)。このような事情が、『ヴァジュラダーカ・タントラ』が従来限りなく研究者の関心を引かなかった理由の一つとして挙げられるだろう。これに対して同じチャクラサンヴァラ系の重要經典でも、たとえば *Abhidhānottarottaratantra* (以下、『アビダーノータローッタラ・タントラ』) や *Dākārnavatantra* (以下、『ダーカールナヴァ・タントラ』) は相当数の紙写本が現存しており、それらが『ヴァジュラダーカ・タントラ』に代わって、広く受容されてきた様子がうかがわれる。『ヴァジュラダーカ・タントラ』と比較すると、『アビダーノータローッタラ・タントラ』は、チャクラサンヴァラ系のエポックメイキングな議論の一つである人間の身体内理論、特に筆者が「時間の輪」と読んでいる時間・存在論的議論⁽²⁾に関しては遅れをとっている感があるが、曼荼羅のヴァリエーションや曼荼羅を用いた具体的実践法が充実して

おり、また『ダーカールナヴァ・タントラ』は『ヴァジュラダーカ・タントラ』の身体内理論を発展・体系化させる傾向が見られる（この点については別稿で論じたい）。特に『ダーカールナヴァ・タントラ』は、チャクラサンヴァラ系密教の經典群の中では最後期のものであり、かつ思想的クライマックスに相当する位置にあると考え得る（この点についても別稿で論じたい）。『ヴァジュラダーカ・タントラ』が『アビダーノータロータラ・タントラ』や『ダーカールナヴァ・タントラ』の繁栄に圧されたのは自然の成り行きであったのだろう。

しかし、このことによって『ヴァジュラダーカ・タントラ』の研究意義が、単に比較的古い時代のチャクラサンヴァラ系の分析に限定されるわけではない。というのは、上記の意義を持つ『ダーカールナヴァ・タントラ』は『ヴァジュラダーカ・タントラ』の内容を踏まえた上でないと、内容を理解するのが困難である場合が多々あるからである。その受容の広さのゆえか、『ダーカールナヴァ・タントラ』は以前から時に研究者の関心を引いてきた。しかし、それらの先行研究は、同タントラの基本的思想を十分抽出し得ているとは言いがたい。これは、直接には同タントラの多数の現存写本が比較的新しい時代のものであり、書写の際に数多くのコラプション（＝単なる写し間違い：同タントラが当初から採用していたと予想される“意味ある”イレギュラーな文法に基づく文体や、新たな意味を創出するための“意味ある”変形とは別である）が生じているために意味不明な箇所が多々ある上に、未解読のある特定の諸思想を前提にして經典が綴られていることに起因していると考えられる。同タントラを復元するための多数のコラプションの訂正と、同タントラの前提となっている諸思想を知るという基本作業を可能にする重要な材料の一つが、本稿で扱う『ヴァジュラダーカ・タントラ』なのである。別の言い方をすれば、『ヴァジュラダーカ・タントラ』の教えは、經典名を変え変形をしつつ、チャクラサンヴァラ系のクライマックスの構成を規定しているのである（以上の詳細については、別稿で論じたい）。その意義をどうとらえるにしろ、『ヴァジュラダーカ・タントラ』への注目が従来の研究で希少であったことは、『ダーカールナヴァ・タントラ』の理解、ひいてはチャクラサンヴァラ系密教の全体の概観的理解の進展を妨げていることは少なくとも言えよう。

以上をまとめれば、『ヴァジュラダーカ・タントラ』を研究する意義は、(1)（最古でないにしても）比較的古い時代のチャクラサンヴァラ系密教の姿を明らかにすること、(2) チャクラサンヴァラ系密教の經典群としてはクライマックスに位置し、かつ長く受容されたと考えられる『ダーカールナヴァ・タントラ』の内容を理解する重要なパートナーとなることである。さらに言えば、(3) いくつかの局面においては、『ヴァジュラダーカ・タントラ』はインド密教の別のセクションに属する經典である *Catuspūthāntra*（以下、『チャトウシュピータ・タントラ』：この伝統もネパールの伝統仏教で重視されてきた）とチャクラサンヴァラ系密教を橋渡しする役割も持っている⁽³⁾、その研究はチャクラサンヴァラ系と『チャトウシュピータ』系との関連の研究へとつながる。また、(4) 前掲『智山学報』2003年拙稿で簡潔に論じたように、『ヴァジュラダーカ・タントラ』はヒンドゥー教のタントラとの影響関係も見られるので、仏教とヒンドゥー教の交渉史を明らかにする一契機をも提供する。

このように、『ヴァジュラダーカ・タントラ』はヒンドゥー教との関連を考慮したインド後期仏教史、およびネパールの伝統仏教史に関する超域的研究の、直接的であれ間接的であれ、一つの重要なキーになっていると言える。

.....

今回の試訳では、以下のような方針をとった。

- 試訳の各章題は『ヴァジュラダーカ・タントラ』の章題と同一である。
- 試訳の各章題に付された番号は、『ヴァジュラダーカ・タントラ』の各章番号を表わす。
- 各段落の末尾に付されている [1-5][12] といった数字は、梵文テキストに付した整理番号と一致する。

なお、筆者は前掲『智山学報』2002年拙稿において第42章（これは第1章の自注であるが、単純な注釈ではなく、第1章の記述を身体的に解釈し直そうとするものである）のテキストも提供したが、38章の試訳までで規定のページ数をすでに超過しているため、今回はその全訳を割愛し、次回にまわすことにした。また、今回は『ダーカールナヴァ・タントラ』の写本（Kathmandu Reel No.B113/6⁽⁴⁾, Kathmandu Reel No.A142/2）を新たに参照する等を行い、先に発表したテキストの数箇所を訂正して訳している。その際には該当箇所の注にその旨を記した。

『ヴァジュラダーカ・タントラ』

1. 最高の真実を観察する境界へと降り立つ智慧

ヴァジュラダーカに敬礼します。

すべての茶枳尼たちで構成される存在者 (*sattva*)⁽⁵⁾であり、“最高の楽” (*param sukham*) であるヴァジュラダーカは、秘密にして最高である心地よい“すべてを我とするもの”の中につねに安住している⁽⁶⁾。彼は自ずからある者、世尊であり、まさしく唯一の最高神である。誓約 (*samaya*) [に基づく] 行の数々の領域は、音の姿を持つ起源から生じている⁽⁷⁾。[“最高の楽”は] 三界で得難い。[それは] 始めと中間と終わりに安住している⁽⁸⁾。愛欲はない。離欲はない。中間は得られない⁽⁹⁾。これはくすべての女性たちという幻>というムドラー (*mudrā*) である⁽¹⁰⁾。[それは] 最上なる不二の智慧である。悪しき行為をなす女性たちでさえ、すべて⁽¹¹⁾の獲得による楽を喜ぶことにより、成就する。すべての虚空を行くことの成就が、茶枳尼であると説明される。あらゆるところに、あらゆるムドラーがある⁽¹²⁾。あらゆるところにおける、あらゆる“最高の楽” (*samvara*)⁽¹³⁾によって、すべての茶枳尼たちとの等しき結合 [を有する] ヴァジュラダーカが説明される。[1-5]

誤った思考 [に基づく] ヨーガ [をする者] たちが神を観想するとき、[それは] 鑄造物などにおける形像との等しき結合 (=身体の外にある単なる造形物との結合) となる。良き真実⁽¹⁴⁾の思考 [に基づく] ヨーガ [をする者] たちが神を観想するとき、“自身”との結合 (*ātmayoga*) という自らの誓約 (*samaya*) が成就する。[そのような結合は] 最も優れて不壊である。[そのような彼は] “菩提心”⁽¹⁵⁾との等しき結合 [を有する者] であり、自ずからヨーガの主権 [を持つ] 主である。この“菩提心”は、すべての仏たちをそのあり方とするので、金剛である。そのゆえに、あらゆる努力をして、あらゆる姿を持つもの [である“菩提心”としてのヴァジュラダーカ] を彼は供養するべきである。[“菩提心”は、] 世界との親類関係をそのあり方とすることによって、遍在している。まさしく“自身” (*ātmā*) は“一切の仏たること”であり、“一切の勇者たること”に他ならない。それゆえに、自分の最高神との結合によって、彼はまさしく“自身”として [“自身”を] 成就するべきである。これにより、まさしく現世で、“一切の仏たること”と“一切の勇者たること”と“一切の持金剛たること”が成就する。[6-11]

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来であり、すべての茶枳尼たちとの等しき結合 [を有する] ヴァジュラダーカであり、“最高の楽”である世尊は語った。[12]

すべては虚空 [のあり方] を特徴としている。そして虚空もまた特徴がない。まさしく三界のすべては、あますところなく幻のようである。いたるところで、[すべては] まさに幻のように見られ、触られる。世界すべての確固性は得られない。このムドラーに即して、ヨーガ行者は三界を食するべきである⁽¹⁶⁾。[13-14]

愚かな者たちを [輪廻に] 束縛するものによってこそ、賢者たちはここ (=輪廻の中) で戯れる。すべてを完備したヨーガによって [彼は戯れる]。他の方法では、彼は燈火のように [虚しく] 去る。色はヴァイローチャナ仏である。受はヴァジュラスールヤ [仏] である。想はパドマナルテーシュヴァラ [仏] である。同様に、行はヴァジュララージ [仏] である。識はヴァジュラサットヴァ [仏] である。かのヴァジュラダーカはすべての色 [などの五蘊] をそのあり方とする

と知られる。[ヴァジュラダーカは]まさしく唯一の偉大な存在であり、すべての喜びの附与者である。[彼は]マハーマーヤー (=大いなる幻) をそのあり方とすることより、塵を離れているとも塵とも言われている⁽¹⁷⁾。地[界]はパータニー[女神]である。同様に、水界はマーラニー[女神]である。火界はアーカルシャニー[女神]である。同様に、風[界]はナルテーシュヴァリー[女神]である。虚空界は自ら行く女 (*svagāminī*) であるマハーマーヤー[女神]であると言われている。金剛なる女主人である彼女は、五元素をそのあり方としている。[彼女は]すべての元素との等しき結合 [を有する] 荼枳尼であり、最高に燃え上がる⁽¹⁸⁾。両眼はモーハヴァジュラと言われる。耳はドヴェーシャヴァジュラと言われる。同様に、鼻はイールシュヤーヴァジュラである。口はラーガヴァジュラであると言われる。触はマートサルヤヴァジュラである。[そして]すべての処と等しき結合 [を有する] ヴァジュラダーカは、“最高の楽”である⁽¹⁹⁾。[15-22]

この一切は空なる姿を持つ。空なる形を持つ眼によって [そのように一切を] 見る、無分別の [認識状態にある] 正しい者たちは、恐れをなくすだろう。そこにおいて、すべては虚空の姿を持つ。虚空の姿を持つ心によって、恐れない修習に従事する者は、無分別の [認識状態にある] 者となる。[23-24d]

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来である世尊は語った。[24ef]

[次に、世尊は]「すべての如来たちの、確実に効力を発し [かつ] 妨げられることのない誓約の大楽」という名の三昧の次第を行い、このように述べた —

最高の賢者たちは、輪廻の状態にあるあいだ、[あえて] いまだ涅槃していない者たちとして、人々への無比の利益を行うことができる。まさしくこのゆえに、正しい人々は、輪廻の輪繩にあつて、つねに恐れず落胆していない者たちとして、とても勇敢に、人々への良き利益を行う。[輪廻にあつて] 虚空に位する状態が生じるべきである。人々の利益に専念する心を持つ勇者たちの誓願の清浄さを目指して、輪廻の清浄さを目指して、そしてこれら神の子たちと、つねに食欲に酔っている者たちと、食欲ある他の者たちの利益を目指して、すべての食欲の清浄さを目指して、大楽の良き成就を目指して、私は今日、大部の儀礼の集成を授けよう。[それは] 始めも終わりもなく、すべての劫の始めに語られたものである。[25-29]

かつて、いにしへの、まさしく劫の始めに、大楽を有する者がいた。そこにおいて、[彼は] ヴァジュラサットヴァの偉大さ [そのもの] であり、唯一の最高神であった。それから、すべての存在の主 [である彼] は、すべての生ける者たちを生じるために、すべての世界の頂上において歌と楽器などの音楽を奏でた。[彼は] 性の享楽 (*surata*) のような“私”⁽²⁰⁾に他ならず、すべての生ける者たちの起源であった。彼から生じた生ける者たちは、欲望と食欲から切り離されていた。だが彼ら [生ける者たち] が正しく振る舞うのを知ると、文字を起源としない者 [である彼] は、虚空のごとき無我なる者として観照しつつ、ブラフマンとなった (=真理の中に没入し、活動を停止した)。その上、人々への利益と仏への利益というこの上ないもの、そして他に、自分への利益と他人への利益、そしてすべての世界への利益を、誰もすることができなかった。彼はつねに空となった。そして生ける者たちへの利益がないがために、すべて [の生ける者] は地獄へと赴いた。すると、他のすべての世界にいるすべての仏たちは、一丸となって、“私” [という彼 (以下同じ)] をすみやかに促した—「オーン 大楽であるヴァジュラサットヴァよ! ジャハフーン ヴァン ホーフ あなたは性の享楽のようである」。すべての楽を与える“私”が促されただ

けで、世界は、すべての樂を保有するものとして[再]生し、浄化された望みごとは達成された⁽²¹⁾。“私”は望みのままの姿をとれる最高の者であり、すべての仏たちによって加持されている。また“私”は法身という最高の者であり、“すべての仏たること”という主である⁽²²⁾。[“私”は]すべての仏たちの偉大な貪欲であり、すべての仏たちの大樂である。[“私”は]すべての仏たちの偉大な身体であり、すべての仏たちの言葉であり、すべての仏たちの偉大な心である。[“私”は]すべての仏たちの大いなる偉大さ[そのもの]であり、すべての仏たちの大王であり、すべての持金剛たちの主であり、すべての世界の主の主であり、すべての宝の主の主である。すべての茶枳尼たちとの等しき結合のゆえに、[“私”は]すべての仏たちと等しい。そしてすべての仏たちから構成されるので、[“私”は]ヴァジュラダーカであると説明される。[30-41]

さて、大曼荼羅の実践により、完全な曼荼羅を彼は描くべきである。その中央に、彼は正しくヴァジュラサットヴァを置くべきである。[ヴァジュラサットヴァは]微笑みを浮かべ、月の色をしており、同様に、赤色の光で充滿し、仏たちの環で飾られ、すべての装飾で飾られ、4つの顔と4本の手と[1つ1つの顔にそれぞれ]3つの眼を持ち巻毛の被り物を頭に載せ、4人の女神(vidyā)たち⁽²³⁾に四方を囲まれ、仏像⁽²⁴⁾で飾られている。[ヴァジュラサットヴァの]右[の顔]は黒色で親しげである。他に同様に、左[の顔]は赤色である。後ろ[の顔]は黄色である。踊りながら頭蓋骨の器に住し、三十三天を恐れさせ、金剛杵と剣を持ち、鈴と頭蓋骨の器[を持ち]、茶枳尼たちの輪に囲まれている者[であるヴァジュラサットヴァ]を、様々な庇護者たちも含めて、彼は描くべきである。[彼は]すべての茶枳尼たちとの等しき結合[を有する]ヴァジュラダーカ、[すなわち]“最高の樂”である。[42-47d]

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来である世尊は語った。[47ef]

母と姉妹と娘と、同様に親類の女がいる。[彼女たちを]つがいのヨーガによって(dvandvayogena)愛するならば、[彼は]すべての成就を成し遂げる。[何ものも]恐れない者は、牛の肉と馬の肉など⁽²⁵⁾を食べるべきである。[彼は]世界の中にあつて、つねに左に即して行動する(vāmācārah)。左[手]による布施と食事が[なされる]。生物から物質・植物にいたるまで世界全体は、左から生じている。女使者を捨てて去るならば、[彼は]すべての欲望に惑わされた者[となる]。女使者がつねに愛されたならば、彼はまさに解脱に生じる。疑いはない。実践者は、禁戒ではないもの⁽²⁶⁾を捨て、禁戒を成就しており、義務に専念する。[彼は]誓約の部族(samayakula)で実践する者に他ならない⁽²⁷⁾。[彼は]一ヶ所でチャル供物を食べる。5つのヴァルナを等しく実践する者[である彼]は、1つのヴァルナを示すべきである⁽²⁸⁾。樟腦を含み、赤い白檀と混ざられ、金剛水が混入した甘い血、これは、すべての成就を成し遂げる五甘露である⁽²⁹⁾。ヨーガを知る者は、つねに薬指と親指の先端で[それを]舐めるべきである。ソーマ酒を飲むように味わたのち、彼は永遠の成就を獲得する。美しい女よ！この最高の誓約(samaya)があなたに説明された。[48-55]

無分別の状態にもとづいて[何ものも]恐れない者が、すべての行為を、方便を伴って行うとき、[それは]数ある禁戒の中でも最上中の最上のものである。彼が無分別の状態にもとづいて[何ものも]恐れずに、すべての行為をつねに行うならば、それはそれら[最上中の最上の禁戒]の中でも最上中の最上のものである。ケーショードウカの知覚にもとづいて[何ものも]恐れない心により数ある知覚対象に現に奉仕しているとき、それは超克し難い苦行である。すべての

行為を般若と結び付け、そしてそれ（＝般若）が空なる住居に結び付けられることは、大我たちの苦行に他ならない。般若のようなもろもろの姿形を無分別の心で【観察し】、【何ものも】恐れない実践【に基づいて】逍遥することは、彼ら大我たちの苦行である。般若と方便から離れ、心が別のところに踏み入らないならば（＝心が般若と方便と結びついているならば）、それは偉大な菩提の賦与であると確かに詳説される。【55-61】

無分別に従い、専念する彼らヨーガ行者たちにとっては、すでに生じているもの（*bhūta*）すべてが般若波羅蜜多のようである。般若は鏡のようである。そして形成されたもの（*samskrta*）はそれ【が映し出す】形のものである。無分別をその本質とする心を持つ彼らにとっては、【一切は】般若に存していると言われる。そして【一切を】鏡の映像として、夢の中の幻の事柄のような泡のごときものとして、インドラ網のようなものとして見る者は、主であると言われる。形成されたものを稲妻や蜃気楼【のようなもの】として、【原因が】熟した結果としてその姿のままに見る者にとっては、【一切は】般若に存していると言われる。それゆえに、愛着があるところ（＝現象世界）には、確固性を有するものは何もない。【62-66】

そしてまさに、このように幻のようなあり方をした数々のすでに生じているもの【であって】も【、それら】に即した素晴らしい享受から生じた楽を廻向することによって、素晴らしい結果が少し得られる。その時には何も欲せられない。これら【すでに生じているもの】は物質・植物や生物【といった分別】のあり方をしてはいない。そうではなく、【これらは】ただ輝きのみを特徴としている。もしこれらが、素晴らしい観想をくり返し修習する力に基づいて、素晴らしい楽の喜びをはじめとする目的を生み、【そして】この上ない結果の獲得の原因となるならば、過失は何もない。女尊者である女神よ！それゆえに、彼は遍在する【般若】をあらゆる努力をして供養するべきである。【67-68b】

困難で厳しい数々の抑制によって身体は苦しめられ、干からびる。【身体の】苦しみにより、心は消散される。【心の】消散により、成就是他のあり方となる（＝成就是消え去る）。そして心と体が堅固であることに基づいて、彼はすべての楽によって堅固となるはずである。数々の苦難【の行】によっては、彼は不安定となる。彼は破滅する。身体と言葉と心の堅固さを得たのち、彼は菩提を獲得する。他の方法では不慮の死が【訪れる】。彼は確実に地獄で焼かれる。【68c-70】

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来であり、すべての茶枳尼たちとの等しき結合【を有する】ヴァジュラダーカであり、“最高の楽”である世尊は語った。【71】

以上、『ヴァジュラダーカマハータントラ』における、最高の真実を観察する境界へと降り立つ智慧の章、第1、終わり。

7. 手のムドラーの実践とカンボージカーの標識と特徴など

さて次に、手のムドラーの特徴を私は説こう。(1) 頭頂の鬘に触れる女に対し、彼は頭を示すべきである。(2) 額を示す女に対し、彼は頬を示すべきである。(3) 歯を示す女に対し、彼は舌を示すべきである。(4) 両唇を示す女に対し、彼は顎を示すべきである。(5) 腹を示す女に対し、彼は臍を示すべきである。(6) 尻を示す女に対し、彼は大地を示すべきである。(7) ヨーニを示す女に対し、彼はリングアを示すべきである。(8) 膝を示す女に対し、彼は脛を示すべきである。(9)

手を示す女に対し、彼は腕を示すべきである。(10) 足を示す女に対し、彼は[足の]裏を示すべきである。(11) 指を示す女に対し、彼は爪を示すべきである。(12) 天空を示す女に対し、彼は太陽を示すべきである。(13) 川を示す女に対し、彼は海を示すべきである。(14) 1本の指を示す女に対し、彼は2本の指を示すべきである。[1-7]⁽³⁰⁾

さて、カンボージカー女神による病からの解放について私は語ろう。[彼女は]死者を生き返らせ、寿命と健康を増進させる。私は簡潔に説こう。その、私が説いたものを聴け。[8-9b]

(1) 髪を示す女に対し、彼は額を示すべきである。(2) 両眼を示す女に対し、彼は歯を示すべきである。(3) 臍を示す女に対し、彼は唇を示すべきである。(4) 唇を示す女に対し、彼は歯を示すべきである。(5) 舌を示す女に対し、彼は腹を示すべきである。(6) 脛を示す女に対し、彼は腿を示すべきである。(7) 腿を示す女に対し、彼は足を示すべきである。(7) 足を示す女に対し、彼は[足の指の]爪を示すべきである。(8) 踵を示す女に対し、彼は大地を示すべきである。(9) ケタケタ笑いを見せる女に対し、彼は血を示すべきである。(10) 槍を示す女に対し、彼は刀を示すべきである。(11) 頭頂を示す女に対し、彼は眼を示すべきである。(12) [東・西・南・北の]方角を (*diśāṃ*) 示す女に対し、彼は[東南・南西・西北・北東の]方角を (*vidiśāṃ*) 示すべきである。(13) 尿を示す女に対し、彼は大便を示すべきである。(14) 醜い[顔]を示す女に対し、彼は親しげな[顔]を示すべきである。[9c-16]⁽³¹⁾

さて、頬⁽³²⁾と額には槍があり、鼻⁽³³⁾には刀があり、眼はねじれており、眉は歪んでおり、乳房は隆起し、そして臍は二重になっており (Tib. 臍は円く)、低階級の者の姿をしている。そして[彼女には]円形の3本の線があり、[体系は]丸い。[このような]茶枳尼は、去りながら⁽³⁴⁾、このような標識を示すはずである。[彼女は]地上にあつて去り、戻ってこない。彼女は無意味に笑う。そして彼女は突然[笑いを]止める。そして[彼女は]優しい言葉を語るが、無慈悲でもある。彼女はおしゃべりである。つねに無意味にしゃべる。これらの特徴を持った彼女は、最高の茶枳尼であると知られるべきである。[17-20]

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来である世尊は語った。[彼女は]マハマーヤーとの平等しき結合[を有する]茶枳尼であり、最高に輝いている。[21]

[以上、]手のムドラーの実践とカンボージカーの標識と特徴などの章、第7、終わり。

8. すべての茶枳尼たちのチョーマー

さて、マントラとヴィドヤーである女神の特徴を私は語ろう。(1) 左手を示す者は、恭しい挨拶をしたことになる。(2) 薬指を示すならば、その返礼になる。(3) 腹を叩く者は、「腹が減った」と言ったことになる。(4) 親指で[他の]指を示す者は、「私は食べよう」と言ったことになる。(5) 膝に触れる者は、「私は疲れた」と言ったことになる。(6) 指に触れる者は、「私は疲れがとれた」と言ったことになる。(7) 歯をきしませる者は、「私は肉を食べよう」と言ったことになる。(8) 眉間の皺を叩く者は、「私は束縛された」と言ったことになる。(9) ガルダを叩く者は、「私は解放された」と言ったことになる。(10) 手で手を叩く者は、「今日私はバリ供物を食べよう」と言ったことになる。(11) 右手を示す者は、「あなたはこのようにしなさい」と言ったことになる。(12) 耳を叩く者は、「[私は]滞在しよう」と言ったことになる。[1-6]⁽³⁵⁾

さて、私は言葉のチョーマー（＝暗号語）の規則を語ろう。

(1) “ポータンギ”：「恭しい挨拶」。(2) それに対する“ポータンギ”：「恭しい挨拶」。(3) “ガム”：「私は行きましょう」。(4) “ルンバ”：「私は来ましょう」であると【言われる】⁽³⁶⁾。(5) “ニガラ”：「あなたは与えなさい」。(6) “チャトゥカ”：「あなたは受け取りなさい」。(7) “フリダヤ”：「勇者」。(8) “カウラヴァ”：「殺すこと」。(9) “カルニカー”：「鈴」。(10) “アリカラナ”：「頭」。(11) “ヴァラーハ”：「毛髪」⁽³⁷⁾。(12) “シュラヴァナ”：「耳」。(13) “マンターナ”：「甘露」。(14) “ナラ”：「集合」。(15) “ターリカー”：「茶枳尼」。(16) “ナラカ”：「曼荼羅」。(17) “アムカ”：「葬場」。(18) “カーキラー”：「門」。(19) “シュヴァサナ”：「バラモン種姓」。(20) “バリディ”：「クシャトリヤ種姓」。(21) “ヴィラティ”：「ヴァイシャ種姓」。(22) “クルーラ”：「シュードラ種姓」。(23) “アンタ”：「チャンダーラ種姓」。(24) “アリカ”：「家畜」。(25) “バギニー”：「茶枳尼」。(26) “ムダカ”：「脂肪」。(27) “ダントスバルショー ジフヴァー”：「空腹」。(28) “ガンダヴァーシニー”：「渴望」⁽³⁸⁾。(29) “アーガマナ”：「どこから？」。(30) “スターナード”：「某から」。(31) “キラナ”：「花」。(32) “ランボーダロー ダンタハ”：「笑い」。(33) “ニローダ”：「従事」。(34) “ヴィジニャプティ”：「満足」。(35) “ドゥームラ”：「雲」。(36) “ドゥームラプリア”：「山々」。(37) “サーヌサリタ”：「数々の川」⁽³⁹⁾。(38) “アングリー”：「体支」。(39) “ヴァダナ”：「口」。(40) “ラージカー”：「舌」。(41) “アダナ”：「歯」。(42) “パンクティ”：「幟」。(43) “チャンダ”：「環」。(44) “チャラ”：「風」。(45) “ムリガバティ”：「家畜」。(46) “マンダラ”：「平等」。(47) “シュヴァーサ”：「四辻」。(48) “パルグサ”：「生き物」。(49) “マハークシャラ”：「偉大な家畜（＝人間）」。(50) “チャ”：「山羊」。(51) “ナ”：「人間」。(52) “バ”：「牛」。(53) “マ”：「水牛」。(54) “バ”：「食物」。(55) “アツヤカ”：「王室役人」⁽⁴⁰⁾。(56) “スタ”：「滞在」。(57) “ムカスバルシャナ”：「食物」。(58) “ダントスバルシャナ”：「満足した」。(59) “フリー”：「恥ずかしがること」。(60) “シューニャスバルシャナ”：「性交」。(61) “ウールスバルシャナ”：「さあ、このようにしなさい」。^[7]⁽⁴¹⁾

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来であり、すべての茶枳尼たちとの等しき結合【を有する】ヴァジュラダーカであり、“最高の樂”である世尊は語った。^[8]

【以上、】すべての茶枳尼たちのチョーマーの章、第8、終わり。

14. 地方の布置と勇者と不二なること

さて、“身体【の輪】”と“言葉【の輪】”と“心の輪”の座の内部の区別にしたがって、地方の区分を私は説こう。

(1) 【プリーラ】マラヤ地方は頭である。同様に、(2) ジャーランダラ【地方】は頭頂である。同様に、(3) オーディヤーナ【地方】は右耳であると言われる。(4) アルブダ【地方】は後頭部である。【これら】4つはピータ【という地方群のカテゴリー】の名を持つ。同様に、(5) ゴーダーヴァリー【地方】は左耳をその姿とすると知られるべきである。(6) ラーメーシュヴァラ【地方】は眉間にあると説明される。そして、他のものとして、同様に、(7) デーヴィーコータ【地方】は両眼である。(8) マーラヴァ【地方】は肩である。以上、このようにウパピータ【という地方群のカテゴリー】が【説明された】。【以上のピータとウパピータに属する地方群は】“心の輪”に住し

ている。[それら地方群は]“天空を行く女”たちの座の個別の姿をとると宣告される。[1-4]

同様に、(9) カーマルーパ [地方] は両腋である。(10) オードラ [地方] は両乳房であると見なされる。クシェートラ [という地方群のカテゴリー] はこれらで構成されると説かれる。(11) トリシャクニ [地方] は臍であると理解される。(12) コーサラ [地方] には鼻の先端が [対応する]。[これらは] ウパクシェートラ [という地方群のカテゴリー] であると語られる。(13) カリंगा [地方] は口であると宣言される。(14) ランパーカ [地方] は喉であると言われる。[これらは] チャンドーハ [という地方群のカテゴリー] と呼ばれる。(15) カーンチー [地方] は心臓であると言われる。(16) ヒマーラヤ [地方] は陰茎に [対応する]。[これらは] ウパチャンドーハ [という地方群のカテゴリー] と言われる。以上、このように、すべての地方は“言葉の輪”に住している。[それらの地方群は]“地上を行く女”たちの座の個別の姿をとると宣告される。[5-8]

(17) プレーターディヴァーシニー [地方] はリングに [対応する]。(18) グリハデーヴァター [地方] は肛門である。メーラーパカ [という地方群のカテゴリー] はこれら2つで構成されると宣言される。(19) サウラーシュトラ [地方] は両太股であると言われる。(20) 両脛はスヴァルナドヴィーパ [地方] をその姿とすると知られる。[これら2つは] ウパメーラーパカ [という地方群のカテゴリー] に属する。](21) ナガラ [地方]⁽⁴²⁾ は [足の] 指に [対応すると] と言われる。(22) シンドゥ [地方] は足の裏に他ならない。シュマシャーナ [という地方群のカテゴリー] は [これら2つで構成されると] 説かれる。(23) マル [地方] は [足の] 親指であると宣言される。(24) クラター [地方] は膝であると言われる。これがウパシュマシャーナ [という地方群のカテゴリー] であると茶枳尼たちによって説かれている。[9-12b]

これらの地方は自分の身体に生じる。[それらは身体] 外に対応する [身体] 内に正しく存している。“身体 [の輪]”と“言葉 [の輪]”と“心の輪”における24の区別に基づき、すべての脈管の座が [身体内の] あらゆる方角に [存していると] 宣告される。これらの座にいる娘たちは、脈管の姿をしている。以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来である世尊は語った。[12c-14]

すべての勇者たちとの等しき結合 [を有する] 茶枳尼たちの集会の“最高の楽” (*dākinījāla-saṃvara*) を、私は簡潔に説こう。その、私が語ったものを聴け。[15]

(1) プッリーラマラヤ [地方] には、爪と齒を流れる [脈管⁽⁴³⁾としての茶枳尼] プラチャンダーが [勇者] カンダカパーリンと共にいる。(2) ジャーランダラ [地方] には、[勇者] マハーカンカーラと [茶枳尼] チャンダークシーがいる。[脈管としての彼女は] 頭髪と体毛を流れる。(3) オーディヤーナ [地方] には、[勇者] カンカーラと [茶枳尼] プラバーヴァティーがいる。[脈管としての彼女は] 皮膚と垢を流れる。(4) アルブダ [地方] には、[勇者] ヴィカタダンシュトリンと [茶枳尼] マハーナーサーがいる。[脈管としての彼女は] 肉を流れる。[以上が] ピータである。(5) ゴーダーヴァリー [地方] には、[勇者] スラーヴァイリナと [茶枳尼] ヴィーラマティーがいる。[脈管としての彼女は] つねに筋肉を流れる。(6) ラーメーシュヴァラ [地方] には、[勇者] アミターバと [茶枳尼] カルヴァリーがいる。[脈管としての彼女は] 一連の骨を流れる。(7) デーヴィーコート [地方] には、[勇者] ヴァジュラプラバと [茶枳尼] ランケーシュヴァリーがいる。[脈管としての彼女は] つねに肝臓を流れる。(8) マーラヴァ [地方] には、[勇者] ヴァジュラデーハと [茶枳尼] ドルマツチャーヤーがいる。[脈管としての彼女は] 心臓を流れる。

女神よ！以上、このように“心の輪”にいる“天空を行く女”が説明された。【彼女は勇者と】結合している。[16-17]

(9) カーマルーパ【地方】には、【勇者】アングリカと【荼枳尼】アイラーヴァティーがいる。【脈管としての】彼女はつねに眼を流れる。(10) オードラ【地方】には、【勇者】ヴァジュラジャティラと【荼枳尼】マハーバイラヴァーがいる。【脈管としての彼女は】胆汁を運ぶと言われる。【以上が】クシュートラである。(11) トリシャクニ【地方】には、【勇者】マハーヴィーラと【荼枳尼】ヴァーユヴェーガーがいる。【脈管としての彼女は】肺を流れる。(12) コーサラ【地方】には、【勇者】ヴァジュラフーンカーラと【荼枳尼】スラーバクシーがいる。【脈管としての彼女は】腸の環を流れる。【以上が】ウパクシュートラである。(13) カリंगा【地方】には、【勇者】スバドラと【荼枳尼】シュヤーマデーヴィーがいる。【脈管としての彼女は】腋の線を流れると言われる。(14) ランパーカ【地方】には、【勇者】ヴァジュラバドラと【荼枳尼】スバドラーがいる。驢馬【のような彼女は】は【脈管として】胃につながる。【以上が】チャンドーハである。(15) カーンチー【地方】には、【勇者】パイラヴァと【荼枳尼】ハヤカルナーがいる。【脈管としての彼女は】排泄物を運ぶと言われる。(16) ヒマーラヤ【地方】には、【勇者】ヴィルーパークシャと【荼枳尼】カガーナナーがいる。【脈管としての彼女は】頭髮の分け目の中央を行く。【以上が】ウパチャンドーハである。【これらの、】“言葉の輪”にいる“地上を行く女”は、【勇者と】結合している。[18]

(17) プレーターディヴァーシニー【地方】には、【勇者】マハーバラと【荼枳尼】チャクラヴェーガーがいる。【脈管としての彼女は】つねに粘液を運ぶ。(18) グリハデーヴァター【地方】には、【勇者】ラトナヴァジュラと【荼枳尼】カンダローハーがいる。【彼女は】つねに膿汁を運ぶ。(19) サウラーシュトラ【地方】には、【勇者】ハヤグリーヴァと【荼枳尼】シャウンディニーがいる。【脈管としての彼女は】血を運ぶ。(20) スヴァルナドヴィーパ【地方】には、【勇者】アーカーシャガルバと【荼枳尼】チャクラヴァルミニーがいる。同様に、【脈管としての彼女は】汗を運ぶ。【以上が】メーラーパカとウパメーラーパカであると理解される。(21) ナガラ【地方】には、【勇者】マーラーリと【荼枳尼】スヴィーラーがいる。【彼女は】脂肪を運ぶ。(22) シンドゥ地方には、【勇者】パドマナルテーシュヴェアラと【荼枳尼】マハーバラーがいる。【脈管としての彼女は】つねに涙を運ぶ。【以上が】シュマシャーナである。(23) マル【地方】には、【勇者】ヴァイローチャナと【荼枳尼】チャクラヴァルティニーがいる。【脈管としての彼女は】痰液を運ぶと言われる。(24) クラター【地方】には、【勇者】ヴァジュラサットヴァと【荼枳尼】マハーヴィールヤーがいる。【脈管としての彼女は】鼻汁を運ぶ。【以上が】ウパシュマシャーナである。【これらの、】“身体の輪”にいる“地下に住む女”は、【勇者と】結合している。[19]

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来であり、すべての荼枳尼たちとの等しき結合【を有する】ヴァジュラダーカであり、“最高の楽”である世尊は語った。[20]

以上、地方の布置と勇者と不二なることという名の第14章。

18. 集会の確定

さて次に、数々のタントラの中では確定を秘してから、[今、ここで]私は語ろう。この小部の儀礼が、集会が説明される。聞け！[それは]成就[をもたらす]。[1]

優れた“最高の樂”[が生じ得る数々の場所]に⁽⁴⁴⁾、ピータなどがある。茶枳尼たちは[それらの地に]遍在する。彼女たちは各地方に生まれる。[そして彼女たちは]各自の出生の地で智慧と結びついている。彼女たちは茶枳尼たちと呼ばれ、金剛なる曼荼羅の女主人たちである。6人の女ヨーガ行者たち⁽⁴⁵⁾は成就[をもたらす]。[各地方では]異国の言葉が話されている。[2-3]

(1)(2) クラター[地方]とマル地方にいる女たちは母たちである⁽⁴⁶⁾。(3)(4) シンドウ[地方]とナガラ[地方]にいる女たちは部族の女主人たちである⁽⁴⁷⁾。(5)(6) ランパーカ[地方]とサウラーシュトラ[地方]にいる女たちは部族の女神たちである⁽⁴⁸⁾。(7)(8) ヒマギリ[地方]とカーンチー[地方]にいる女はサンチャーリニーである⁽⁴⁹⁾。(9)(10) パンチャーラ地方とグリハデーヴァター[地方]にいる娘は俱生の姿をしている⁽⁵⁰⁾。(11)(12) カリンガ[地方]とコーサラ[地方]には肉を食う、禁戒を保持する女がいる⁽⁵¹⁾。(13)(14) プレータプリー[地方]とトリシャクニ[地方]には大きな女主人であるカンダローハーがいる⁽⁵²⁾。(15)(16) プールナギリ[地方]とジャーランダラ[地方]にはチャンダラー種姓の女たちがいる⁽⁵³⁾。(17)(18) オードラ[地方]とカーマルーパ[地方]には偉大な娘がいる⁽⁵⁴⁾。(19)(20) デーヴィーコータ[地方]とラーメーシュヴァラ[地方]にいる女は娘であると理解される⁽⁵⁵⁾。(21)(22) ゴーダーヴァリー[地方]とアルブダ[地方]には茶枳尼である最高の女主人がいる⁽⁵⁶⁾。(23)(24) スヴァルナドヴィーパ[地方]が説明されるとまさしく同じように、オーディヤーヤナ[地方]が[説明される]⁽⁵⁷⁾。これらの地方にいる、勇者と不二となって遍在している娘たちはすべて、意のままの姿に変身でき、心の活動を停止させる。[4-5]

さらに、女神は世尊を供養し、礼拝し、このように言った。—「特に、土地の守護者たちととても恐ろしい茶枳尼たち[の名前]、特に、享受すれば実践者に成就が疑いなく生じる場所である土地の名前と住居[の名前]、このすべてを簡潔に私に説いて下さい。主よ！」すると、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来である世尊は[言った]—良きかな、良きかな、偉大なる女神よ！あなたが望んで問うもの、[すなわち]私がまだ誰にも説いていない秘密にしてとても得難いものを、今、私は説こう。自ら行く女マハーマーヤー[であるあなた]は集中して聴け。[6-9]

(1) アッタハーサ[地方]にいる女神は、サウムヤムカーと呼ばれる。[彼女は]月経中の女であり、女神から生まれ、金剛杵という武器を持っている。その森にいる[この]女神は、カダンバ樹に住んでいる。土地の守護者はマハーガンタと呼ばれる力強い者である。[10-11]

(2) コーツラギリ[地方]にいる[女神は]マハーラクシュミーである。[彼女は]カラーラーのヨーニから生まれ、口から牙を見せる女神であり、醜くとても恐ろしい。その町にいる[この]恐ろしい女は、山頂に住んでいる。土地の守護者はアグニムカと呼ばれ、美しい顔をしている。[12-13]

(2) << ジュヴァーラームキーと呼ばれる女は、剣を手に持ち、恐ろしく、ニンバ樹に住んでいる。大きな身体を持つ土地の守護者はマハーヴラタであると知られる。>>⁽⁵⁸⁾ [14]

(3) ダラニー [地方] にいる [女神は] シャンカリーであると知られるべきである。[彼女は] 偉大な火神の体支から生まれ、棍棒という武器を持つ女神であり、ダルマに関する主権を与える。その土地に知られる彼女はターラ樹に住んでいる。土地の守護者はワールドヴァケーシャと呼ばれる。[彼は] とても狂暴である。[15-16]

(4) デーヴィーコータ [地方] にいる [女神は] カルナモーティーである。彼女は、大力者の部族から生まれ、槍を持つ女神であり、あらゆるヨーガの女主人であり、最高である。その座にいる [この] 恐ろしい女はヴァタ樹に住んでいる。土地の守護者はヘートウカである。[彼は] 大きな身体を持ち、最高の主である。[17-18]

(5) ヴィラジャー [地方] にいる [女神は] アンビカーであると知られるべきである。[彼女は] ムドラと鋭利な槍を持ち、親しげな姿をした偉大な女神であり、欲望に関する主権を与える。[彼女は] その土地に炎のような女としてあり (or その土地には [土地の守護者として] アナラがいる。[アンビカーは])⁽⁵⁹⁾、アムラ樹に住んでいる。[土地の守護者は] 大きな声でケタケタ笑い、すべての人々を恐れさせる。[19-20]

(6) エールディー [地方] にいる [女神は] アグニムキーである。[彼女は] カパーラーの部族から生まれ、金剛杵と刀を持つ女神であり、陶酔の土地にいる。その町にいる [この] 女神はカーンチャナ樹に住んでいる。とても勇敢な土地の守護者は、ガンターラヴァと呼ばれる。[21-22]

(7) それから、ブラ (Tib.および *Āmnāyamañjarī*. プレータブラ, *Kubjikāmatatantra*. ハスティニープラ) [地方] にいる [女神は] ピンガラーと呼ばれる。[彼女は] とても恐ろしげな眼を持ち、杵という武器を持つ女神であり、カラーラーのヨーニから生まれる。その土地にいる [この] 女神はジャティー樹に住んでいる。土地の守護者はマハージャンガである。[彼は] 醜く、甚だしく輝く。[23-24]

(8) エーラープラ [地方] にいる [女神は] カラスターである。[彼女は] プラチャンダーの部族から生まれ、縄を手に持ち、とても恐ろしく、陶酔の土地にいる。その神殿にいる [この] 女神は力強く勇敢である。土地の守護者はガジャカルナと呼ばれる。[彼は] 偉大な長兄である。[25-26]

(9) カシュミーラ [地方] にいる [女神は] ゴーカルニーである。[彼女は] チャンダースヤーのヨーニから生まれ、金剛杵と鎖を手に持ち、敵の消滅に専念している。その座にいる [この] 女神は山頂に住んでいる。土地の守護者はナーディージャンガと呼ばれる。[彼は] とても恐ろしい。[27-28]

(10) マル地方にいる [女神は] クラマニーである。[彼女は] 恐ろしい顔をしており、勇者から生まれ、鉤と縄を持つ女神であり、陶酔の土地にいる。その地方にいる [この] 女神は大きな砂漠に住んでいる。土地の守護者はカラーラと呼ばれる。[彼は] 陶酔しており、大きな口をしている。[29-30]

(11) ナガラ [地方] にいる偉大な女神はヴェーターラーと呼ばれる。[彼女は] 鋤を手に持ち、偉大な火神の体支から生まれ、すべての勇者の願いをかなえる。その座にいる [この] 賢い女はヴェートラ樹の穴 (Tib. ヴェートラ樹園) に住んでいる。土地の守護者はローマジャンガと呼ばれる。[彼は] とても狂暴である。[31-32]

(12) パウンドラヴァルダナ [地方] にいる女神はチャームンダーと呼ばれる。[彼女は] 大力者

の部族から生まれ、カトヴァーンガ杖を手に持ち、享受と解脱をひき起こす女神であり、すべての罪を消滅させる。その土地にいる土地の守護者はクンバと呼ばれる。[33-34]

(13) ジャヤンティ [地方] にいる [女神は] プラサンナーサーである。[彼女は] 赤い花から生まれ、金剛杵と鎖を持ち、すべての喜ばしい願いをかなえる。そこの最高の町にいる [この女神は]、楼閣に住んでいる。土地の守護者はトリジャタと呼ばれる。[彼は] とても狂暴である。[35-36]

(14) プリシュタープラ [地方] にいる [女神は] ヴィデュンムキーである。[彼女は] カラーラーのヨーニから生じる。[彼女は] 杖と刀を持つ女神であり、美しく、すべての者の心を満たす。[彼女は] その土地にいる女神である。恐ろしい姿で恐れさす土地の守護者はガンターラヴァと呼ばれる。[彼は] ふくろうの顔を持つ恐ろしい者である。[37-38]

(15) ソーパーラ [地方] にいる [女神は] アグニヴァクトラーである。[彼女は] 短剣を手に持ち、ピンターサナー⁽⁶⁰⁾と [も] 呼ばれ、楽に関する主権という願いをかなえる。その土地にいる [この] 偉大なる女神はシャルマリ樹に住んでいる。土地の守護者は恐ろしい者である。すべての目的に関して縁起が良い。[39-40]

(16) チャイトラ [地方] にいる [女神は] カランジャヴァーシニーと呼ばれる。[彼女は] カランジャ樹に住む。[彼女は] カラーラーの刀から生まれ、ムドラーと刀を持つ。その土地にいる土地の守護者はマハーガンタである。[彼は] 力強い者であり、蛇のような髪を逆立て、すべての悪を畏怖させる。[41-42]

(17) オーディヤーヤナ [地方] にいる偉大な女神はグフヤーと呼ばれる。[彼女は] ヨーニから生まれ、金剛杵と鎖を持つ女神であり、とても恐ろしく、神々しい姿をしている。* 土地の守護者はマハーナーダであり、恐ろしい姿をしており、力強い (or 土地の守護者は声が大きく、恐ろしい姿をしているマハーバラである)⁽⁶¹⁾。その最高の座にいる女 (= グフヤー) はアショーカ樹に住んでいる。[43-44]

(18) ジャーランダラ [地方] にいる [女神は] チャンダーリニーであると知られるべきである。[彼女は] ムドラーと短剣を掲げ、ソーマから生まれる偉大な女神であり、すべてに関する主権を与える。その座にいる [この] 恐ろしい女はカナカ樹に住んでいる。[土地の守護者は] ジャネータと呼ばれる。[彼は] 偉大な勇者であり、すべての悪魔たちを畏怖させる。[45-46]

(19) クシーリカ [地方] にいる [女神は] ローカマートリである。[彼女は] 獐猛な風 [をひき起こす] 力強い女であり、剣を持ち、偉大な女神であり、すべての成就を与える。[彼女は] 髪を逆立てる偉大な女神である。[彼女は] サーラ樹に住んでいる。土地の守護者はマハーメールである。[彼は] その土地に住している。[47-48]

(20) マーヤープラ [地方] にいる [女神は] カーミニーである。[彼女は] ビーマの口から生まれ、恐ろしく、金剛杵と刀を持ち、清らかで、実践者に力を与える。[彼女の] 姿は黒く、とても恐ろしい女である。[彼女は] プータ樹に住んでいる。そこには、ビーマという名の力強い土地の守護者がいる。[49-50]

(21) アームラカ [地方] にいる [女神は] プータナーである。[彼女は] すべての敵たちを畏怖させ、鋤と宝を手に持ち、すべての人々を意に従える。[彼女は] ダール樹に住む偉大な女神である。その土地にいる土地の守護者はマハーヴラタである。[彼は] すべての人々を畏怖させる。

[51-52]

(22) ラージャグリハ [地方] にいる [女神は] ヴィパンナーである。彼女は金剛杵と鉤を持ち、大きな傷から生まれ、すべての軍隊に対する勝利をもたらす。* その土地にいる [この] 女神は銅鑼の音で [周囲を] 畏怖させる。土地の守護者はマハーカルナである。[彼は] そこでつねにそばにいる者である (or [彼女は] その土地にいる女神である。土地の守護者はジッリーラヴァという畏怖させる者である。[彼は] 大きな耳を持ち、そこでつねにそばにいる者である) ⁽⁶²⁾。[53-54]

(23) ボータ地方にいる [女神は] サハジャーと呼ばれる。[彼女は] マカラ怪魚と幟を持ち、自ずからあるヨーニから生まれ、親しげな顔で、神々しい姿をしている。その地方にいる [この] 女神は山頂に住んでいる。土地の守護者はボーガと呼ばれる。[彼は] 偉大な勇者であり、倒すのがとても困難である。[55-56]

(24) 同様に、マーラヴァ [地方] にいる [女神は] セーカーである。[彼女は] ムドラーと槌を持ち、実践者たちにつねに愛されている。[彼女には] 美麗さと、数々の称讃がある。その土地にいる [この] 女神はマドゥ樹に住んでいる。土地の守護者はブンススヴァラという名である。[彼は] すべての人々の声を等しく聞くがゆえに] 平等の者であり、すべての主である。[10-58]

これらの土地にいる女は勇者たちに成就を授ける。夜に徘徊するとき、彼女たちはつねに集会を形成する。彼女たちは天空に行くことに關するとても得難い多くの成就を授ける。[彼女たちによって、] 実践者のすべての儀礼が成就する。疑いはない。[59-60]

さて、すべての成就を与える供養儀礼を私は説こう。

特に花や焼香や、同様に燈火や香や供物としてのバリ [が入った] 瓶や、生肉や魚などとともに、数々の食物、すべての資財、また他に五甘露を [準備し]、左側に瓶を [置き]、右に憤怒者を示すべきである。特に、木が一本だけある所、あるいは葬場、あるいは山、あるいは洞窟、あるいは家、あるいは村や町の外れ、あるいは空屋、あるいは湿地、あるいは乾燥地、あるいはまた女神の神殿において、某に依拠する黒い恐ろしい者、とても恐ろしい者を [彼は観想するべきである]。[61-65b]

(1) クリシュナー [女神] と (2) カラーリー [女神] と (3) ビーバトサー [女神] と (4) ナンダーティーター [女神] と (5) ヴィナーヤカー [女神] と (6) チャームンディー [女神] と (7) ゴーラルーピー [女神] と (8) ウマー女神といった母と、 (9) ジャヤー [女神] と (10) ヴィジャヤー [女神] と (11) アジター [女神] と (12) アバラージター [女神] と (13) バドラカーリー [女神] と (14) マハーカーリー [女神] と (15) ストゥーラカーリー [女神] といった女ヨーガ行者と、 (16) インドリー [女神] と (17) チャンドリー [女神] と (18) ゴーリー [女神] と (19) ドゥシュティ [女神] と (20) ランパキ [女神] と (21) トリダシェーシュヴァリー [女神] と (22) カンボージー [女神] と (23) ディーピニー [女神] と (24) チューシニー [女神] とした村に住む女ヨーガ行者 — 彼女 [たち] ⁽⁶³⁾ は恐ろしい姿をしており、体が大きく、牙の剣を口を開いて見せ、頭蓋骨の器の環を身につけ、カトヴァーンガ杖を手に持ち、大神通を行い、剣と斧を手に持ち、金剛杵を手に持ち、同じく弓も [手に持つ]。5人の茶枳尼たち ⁽⁶⁴⁾ は、偉大な真実とすべての願いを達成させる ⁽⁶⁵⁾。[彼女たちは] ヨーガと曼荼羅の女王であり、金剛なる女主人であり、また強力である。如来の偉大な身体は無垢である [と彼は知るべきである]。ヨーガにおける空性が [知られるべきである]。[65c-71b]

今、すべての金剛の女主人たちを、命令によってあらゆる方角から彼は引き寄せるべきである⁽⁶⁶⁾。

オーン カ カ ガダナ ババ バンダナ カ カ カダナ すべての悪しき者たちを打て 打て 殺せ 殺せ 某の目的をかなえよ フーン フーン フーン パト ジャハ 幸あれ

甘露⁽⁶⁷⁾で【女神たちの】口を満たして、彼はすべての神を喜ばせるべきである。ヨーガ【のための】女ヨーガ行者たちを観想するならば、すべての儀礼が成就する。

オーン 食べよ 食べよ【あなたは】すべてのヨーガの女主人である フーン フーン フーン ジャハ 幸あれ

数々の儀礼に即して⁽⁶⁸⁾、バリ供物の儀礼を彼は実践するべきである。息災、増益、敬愛、鈎召、呪殺、離間、停止といった、ヨーガ行者たちのすべての儀礼を、バリ供物の儀礼⁽⁶⁹⁾によって彼は成就するべきである。智慧の鈎⁽⁷⁰⁾の区別にしたがって、彼は自分の守護尊を喜ばせるべきである。【71c-74】

クシュートラやピータ【などの諸聖地】、またあるいは村、あるいは町、あるいは山頂において、多くの“眼を瞑ること”（＝曼荼羅）が生じている。それが集いとしての集会である。集いとしての集会は、その実践者の願いをかなえる。実践者は、献身に耽った者であっても、つねに【神々の聖地としての】座などに身を置くべきである⁽⁷¹⁾。女神は実践者の数々の願いをかなえる。疑いはない。【75-76】

実践者たちを成就へと導く、“流れ”（*srāva*）⁽⁷²⁾によって遂行されるべき儀礼を私は語ろう。【その儀礼は】精力減退・老齢・皮膚病・癩病などを免れている（＝その儀礼により、精力減退等から免れることができる）。瞑想者は精霊の日に【その“流れ”】獲得し、成就するべきである。特に、五甘露を聖水によって彼は清めるべきである。彼は同一のそれに脂肪を塗り、焼香を与えるべきである⁽⁷³⁾。四角形のもの、【その】中央に三角形のもの⁽⁷⁴⁾を彼は熱心に作るべきである。順序よく正しくすべての仏たちの【集合体】彼は【その三角形に】流すべきである。実践者は「ハ ハー ヒ ヒー フン フーン ヘー ハイ」という8種の笑いを実行し、風⁽⁷⁵⁾によって点火した、火⁽⁷⁶⁾に乗った種【字】⁽⁷⁷⁾を、天辺に【チャンドラビンドゥを】つけてから⁽⁷⁸⁾、大地で供養し⁽⁷⁹⁾、女ヨーガ行者の中央（＝先の三角形の中央）に置くべきである。流れたものを熱心に見てから、ヨーガ行者は自分がヨーニの中央にいと順序正しく思念するべきである⁽⁸⁰⁾。女使者の光で満ちた、炎の環の大海を彼は見るべきである。【77-82】

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来であり、すべての荼枳尼たちとの等しき結合【を有する】ヴァジュラダーカであり、“最高の樂”である世尊は語った。【83】

以上、集会の確定という名の成就法儀礼、第18章。

22. ヨーガ行者と女ヨーガ行者の悦なる戯れと言葉のムドラーというあらかじめ取決められた合図の特徴に関する規則

さて次に、ムドラーとしての言葉の特徴を私は語ろう。ヨーガ行者たちは右側に、女ヨーガ行者たちは左側【に立つ】。

(1) 指を口の中に入れば、[それは] ダーキニー [女神] の標識である。[これに対する返答 —] 「ゴグ」。 (2) 合掌を頭の上に置けば、[それは] ディーピニー [女神] の標識である。[これに対する返答 —] 「ググ」。 (3) 親指⁽⁸¹⁾を締めつければ⁽⁸²⁾、チューシニー [女神] の標識である。[これに対する返答 —] 「ムグ」。 (4) 手⁽⁸³⁾で耳を叩けば、カンボージー [女神] の標識であると賢者は [知るべきである]。[これに対する返答 —] 「ルグ」。 (5) 鼻の先端を叩けば、「ごきげんいかが」と尋ねたことになる。[これに対する返答 —] 「ドラシュトウ」。 (6) 鹿の頭を示せば⁽⁸⁴⁾、「ヨーガ行者であるあなたは標識などに専念せよ⁽⁸⁵⁾」 [と言ったことになる]。[これに対する返答 —] 「ガンドデー」。 (7) 眉間に触れる [ヨーガ行者] は、「あなたは私の愛しい人として [私に] 望まれている」 [と言ったことになる]。[これに対する返答 —] 「アグニダーハ」。 (8) 歯で舌を噛んだなら、「集会で私はバリ供物を食べましょう」 [と言ったことになる]。[これに対する返答 —] 「バクショーヨー」。 (9) 手に草などをつかめば、「あなたの家でお会いしましょう⁽⁸⁶⁾」 [と言ったことになる]。[これに対する返答 —] 「ドヴィラティ」。 (10) 心臓に手を置けば、「今、[ヨーガ行者である] あなたは私に愛されている」 [と言ったことになる]。[これに対する返答 —] 「ルチャダーヴァト」。 (11) 耳の付け根に拳を結べば、「何もない」 [と言ったが] ごとく [になる]。[これに対する返答 —] 「シューニャター」。 (12) [手を] 伸ばして腹を叩けば、「獲得がある」 [と言ったが] ごとく [になる]。[これに対する返答 —] 「トリカサハ」。 (13) 臍を締めつけるときは、食事用の食物を望んでいる。[これに対する返答 —] 「チャンダーリカー」。 (14) 人差し指で前面を示せば⁽⁸⁷⁾、恐ろしいチャンダーリーのような恐ろしい者ようになる。[これに対する返答 —] 「ニーラダダヴァト」。 (15) 眉に触れれば、「ここで、私の望みが示された」 [と言ったことになる]。[これに対する返答 —] 「アナンガーユダハ」。 (16) 舌を戯れさせれば⁽⁸⁸⁾、「今、あなたは死んだ⁽⁸⁹⁾」 [と言ったことになる]。[これに対する返答 —] 「ドウルガティ」。 (17) あらゆる方向を見るならば、[それは] 日付⁽⁹⁰⁾を知りたいと望む [サインである]。[これに対する返答 —] 「ターラーガナハ」。 (18) 第 1 暦日から始めて、親指が様々に置かれる。不壊なるものの中央に日付がある。前述のものに続いて触れるべきである⁽⁹¹⁾。[これに対する返答 —] 「ギリ」。 (19) 上方を見るならば、正午時に遊戯する [サインである]。[これに対する返答 —] 「サマツチャーヤー」。 (20) [女ヨーガ行者が] 微笑むとき、川を⁽⁹²⁾見てから手で手をつかめば、「あなたは財産を与えよ」と示したことになる。[これに対する返答 —] 「ジールナヴァト」。 (21) 両手を握り締めれば、「相応しい女であるあなたは (or 相応しい者よ！ あなたは) 今や来れ」 [と言ったことになる]。[これに対する返答 —] 「スヴァルパヴァト」。 (22) 薬指で親指を⁽⁹³⁾触れるならば、[それは] 甘露を [示す]。[これに対する返答 —] 「ソーマ」。 (23) 怒り (= 人差し指) で親指 [を触れるならば]⁽⁹⁴⁾、食物などを [示す]。[これに対する返答 —] 「スールヤ」。 [1-24]

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来であり、すべての茶積尼たちとの等しき結合 [を有する] ヴァジュラダーカであり、“最高の楽”である世尊は語った。[25]

以上、ヨーガ行者⁽⁹⁵⁾と女ヨーガ行者の悦なる戯れと言葉のムドラーというあらかじめ取決められた合図の特徴に関する規則、第 22 章。

36. 異国の舞踊と誓約と戒【としての“最高の楽”】の儀礼

さて次に、実践者たちに正しく私は説こう。

毎日、毎月、毎年、あるいは加持【のあった時】にしたがって⁽⁹⁶⁾、ムドラーの成就が生じる⁽⁹⁷⁾。実践者は蓮華の器を左手でつかみ、彼の右手にトリパターカ印をあらわすべきである⁽⁹⁸⁾。すべての金属より成る【象徴物】、あるいはまた、生命に関するものと【木の】根より成る【象徴物】がある。色彩豊かな【装飾】、整えられた【装飾】がある⁽⁹⁹⁾。【それらを】すべての師に彼は施すべきである⁽¹⁰⁰⁾。神聖な装飾に身をつつみ、手にムドラーを飾り⁽¹⁰¹⁾、仏との結合から生じる戒【としての“最高の楽”】(samvara)⁽¹⁰²⁾を、大いにとても幸運な者は舞うべきである⁽¹⁰³⁾。[1-4]⁽¹⁰⁴⁾

最高の蓮華に1年間触れることのないヨーガ行者は、誓約(samaya)を損うことになる。そして誓約を損なったときには、「“もう二度と【違反を】犯さない【という誓いの】戒”(punarakarṇasamvara)を私は保持しましょう」【とすべきである】⁽¹⁰⁵⁾。さもなくば、マントラとタントラの実践次第は結果を生まないはずである。[5-6]

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来であり、すべての茶枳尼たちとの等しき結合【を有する】ヴァジュラダーカであり、“最高の楽”である世尊は語った。[7]

以上、異国の舞踊と誓約と戒【としての“最高の楽”】の儀礼、第36章。

38. 女使者を従わせるための儀礼

さて次に、女使者(dūtī)を従わせるための成就法を私は説こう。マントラ【から生じた女性の】身体⁽¹⁰⁶⁾、【女性の】共通の【身体】⁽¹⁰⁷⁾、クシェートラジャ【である女性の身体】(kṣetrāja)、そしていかなる【女性の身体】でも、これはすべてのヨーガ行者たちにとって、楽によって完成されるべき最高に有益なものである。彼女たちの【身体に】乱暴を加えて⁽¹⁰⁸⁾享受するとしたら、彼らは尊敬を得るに値しない⁽¹⁰⁹⁾。彼女は堅固であり、良き幸福に恵まれ、行の部族の吉慶さを持つ。【聖なる女性の諸分類の1つである】チトリニーは心が散漫である。【聖なる女性の別の分類である】プリーヴィーは胸が大きい。貝【のような】臍ならば【聖なる女性の別の分類である】シャンキニーである。これが次第であると説明される。[1-3]

(1) ブータ樹⁽¹¹⁰⁾の根を熱心に口に投じ、恍惚が到来するまで、マントラの保持者は【そのブータ樹を口に】保持すべきである。(2) ガンドウーシャ草とラクシャナ草を押し潰し、胡麻油で彼は焼くべきである。【それを】足に塗る者は、女性たちとの遭遇に際して称賛される。(3) アシュヴァガンダーとパーターと、同様にカトゥローヒニー【という素材】⁽¹¹¹⁾ — それらをまんべんなく混ぜあわせ、アルカ樹の樹液と混ぜ、それを以ってそのリングを持ち上げれば、【リングは】確実に増大する。他の方法ではあり得ない。速やかに湯で洗うならば、願いがかなうだろう。(4) 白い蓮華の雄蕊が蜂蜜と共にあるのを見て(=2つを混ぜ合わせ)、臍に塗ることがこの実践である。堅固な女性は性愛を生じる。(5) 白い胡麻と雄蕊⁽¹¹²⁾と共にエーカヴィーラ樹の根を押し潰し、蜂蜜と牛乳から作ったバターと一緒に臍に塗ってから、女性たちにとって魅力ある、固定することと吸うことを彼は行う。驢馬のように愛欲に奉仕するならば、楽を望む者【である彼】は楽を得るであろう。[4-10]

『律に関して効果的なタントラ』(Vinayāmoghatantra)に陀羅尼がある。私は[そこで以下のことを]語った。女性はリングアによって成就する。そして男性はつねにバガによって[成就する]。リングアは「標識」であると彼らは語った。そしてバガは「繁栄させるもの」である。女性と男性(mudrāmudraṇa)の等しき結合に基づいて、リングアの意味が明示される。入って隠れるがゆえに(līyanāt)リングア(līṅga)と言われる。そして樂を与えるのでバガ(「バガ」には「幸運」という意味がある)[と言われる]。教示の性質に基づいて、[私は]明瞭にされるべきでないものを明瞭にした。バガとリングアは[それぞれ]ア字とヴァ字と結び付いていると言われる。[性の技法の隠語の1つである]蜜蜂(bhramara)などを順々に[行つて]、彼はすべての茶枳尼たちを成就させるべきである。[11-14]

以上のように、持金剛であり、ヴァジュラサットヴァであり、如来であり、すべての茶枳尼たちとの等しき結合[を有する]ヴァジュラダーカであり、“最高の樂”である世尊は語った。[15]

以上、女使者を従わせるための儀礼、第38章。

註

- (1) 周知の通り、この分野の本格的なパイオニアである津田博士は、この系統の密教を“サンヴェアラ系”という呼称で括った。しかし“サンヴェアラ”(saṃvara)という語は、經典の名称としては通常Sarvabuddhasamāyogatantraを指し、また真理の名称としてはたとえばHevajratantraにも頻出するので、筆者は総称として用いていない。筆者が“チャクラサンヴェアラ系”という呼称を用いる理由は、この系統の密教はCakrasaṃvaratantra(『チャクラサンヴェアラ・タントラ』)から始まり、また儀礼・実践書や注釈書の作者たちも『チャクラサンヴェアラ』の名称を(その儀礼書等が実際には『チャクラサンヴェアラ・タントラ』に直接依拠するものでなくても)好んで用いる傾向も少なからず見られるからである。
- (2) それが“出生占い”という方向へと展開した一例については、拙稿“Astrology in Mother-Tantric Literature”『印度学仏教学研究』51-2, 2003年, p.(23)-(26)を見よ。
- (3) その一例については、前掲『印度学仏教学研究』2003年拙稿を見よ。
- (4) Matsunami 144とMatsunami 145は、基本的にこの写本とまったく同系統であり、間違いの箇所もほぼ一致している。
- (5) 「すべての茶枳尼たちで構成される存在者」には少なくとも二重の重要な意味があろう。一つは身体外的な局面(=外的な茶枳尼たちの集会=身体外的な曼荼羅)においてであり、もう一つは身体内的な局面(=身体曼荼羅)においてである。前者においては、曼荼羅の中心であるのみならず曼荼羅の全体でもある最高神ヴァジュラダーカは、その曼荼羅が茶枳尼たちをメンバーとするがゆえに、「茶枳尼たちで構成される存在者」である。後者においては、行者の身体内を走る管状の器官である脈管群(=内的な茶枳尼たち)により行者の身体(=ヴァジュラダーカ)が構成されるのだから、ヴァジュラダーカはまさに「茶枳尼たちで構成される存在者」ということになる。
- (6) Bhavavajraによる注釈(Śrīvajradākanāmamahātāntrarājasya vivṛti, 以下、「注釈」)によれば、「秘密にして最高である心地よい“すべてを我とするもの”とは法界の座であり、そこから仏たちが生じるとする。ところで、“すべてを我とするもの”の中につねに安住している」という定義がヴァジュラダーカに付されていることは、それが身体外的な全体であれ、身体内的なものであれ、ヴァジュラダーカが法界に恒常的に根拠を持っていることを、すなわち真理性を保有していることを明示しているのだと考えられる。

- (7) 注釈によれば、「起源」とは堅固な菩提心、「音の姿を持つもの」とは母音と子音、「誓約」とは二つの月輪、「行」とは種字、「領域」とは標識であり、この文言は全体として、五相現等覚の実践によって世尊の身体が成就することを意味するという。あるいは、「音の姿を持つもの」をやはり母音と子音と考えて、そこから誓約に基づく行の領域、すなわち密教の行の内容すべてが生じると考えることも不可能ではない。その他の解釈も様々に可能である。

なお、*samaya* という語は周知の通り、密教において頻出するタームである。この *samaya* に定訳を与えるのは困難であることは言うまでもない。*samaya* はもともと主には「(拘束力を持つ) 誓い」「戒」「契約」といった意味なのだが、実際にはその包含する内容は具体面で多岐に渡ることになり、後期の密教、特にチャクラサンヴァラ系の密教になると、“*samaya* には大きく 2 種類— 守られるべき *samaya* と食されるべき *samaya*, あるいは別の観点から言えば女神を意味する”ものとして整理される場合が多々ある（これについては、拙稿 “Eight Samayas in the Cakrasaṃvāra Tantra,” 『印度学仏教学研究』50-2, p.(54)-(56), 2002 を見よ)。「守られるべき *samaya*」とは主に灌頂儀礼で授けられる義務や禁戒を指し、「食されるべき *samaya*」とは牛肉や五甘露等の特殊な食事を指す。*samaya* については、なお詳細が今後調査されるべきであることは言うまでもないのだが、*samaya* が具体的に何を指すにしろ、それは行者とともにあることにより行者の密教的行の世界を形成し、それによって行者を包む宇宙全体が真理性を帯びたものであり続けるような役割を持つものである。そのような *samaya* はあらゆる密教行に共通の前提であり、成就の原因であり、そしてそれはただ<信>のみによって得られるものである（前掲『印度学仏教学』2002 年拙稿を見よ）。このように、*samaya* は行者を拘束する力を持ち、行者の宗教世界を形成・維持し、そして翻ってその土台が行者の<信>であるとすれば、*samaya* の訳語として「誓約」が当面は適切であると本稿では考えた。

- (8) 注釈によれば、「始めと中間と終わり」とは誕生と存続と消滅を指す。つまり、この文言は“最高の楽”の偏在性を表わす。
- (9) 周知の通り、これは俱生という、無分別性としての一元性および根源性をその特徴とする真理を表わす常套的表現であり、ここでは“最高の楽”を俱生と関連づけて説明しようとしている。
- (10) 注釈によれば、「女性たち」とは女神たちを指す。つまり、大楽の成就のために、世尊が女性の姿に変身し、人々に現前したという。
- (11) 注釈によれば、「すべて」とは蘊などを指す。
- (12) 注釈によれば、六族の曼荼羅の女神たちを意味する。
- (13) 後期密教における *saṃvara* という語の解釈に関して、チベット語翻訳官がそれを “bde mchog” と “sdom pa” の二種類に解釈しているという津田博士の報告とは別に、インドで実際に行われた解釈の一例として、以下のものが挙げられる。(1) “saṃvara” = “最高の楽” = “param sukham 等” と定義する例— 多くのチャクラサンヴァラ系の文献、およびその他のものとしては、たとえば *Sarvabuddhasamāyogatantra* : śam shes bya ba bde bar bśad / sañs rgyas kun gyi bde chen yin / sgyu ma thams cad rab sbyor ba / mchog tu bde bas bde baḥi mchog。その他には *Yogatnamālā* : ḍākinyo vajradākinyah, tāsām jālaṃ samūho maṇḍalacakraṃ, tena saṃvaraṃ sukhavaraṃ (ed. D.L.Snellgrove, 141.25-26)。(2) “saṃvara” = “覆い隠すこと、秘すること、守ること” (saṃ-vṛ より) — たとえば *Cakrasaṃvārapañjikā* : ḍākinījālasaṃvaram iti, ḍākinyah sarvās tricakravayavasthitāḥ, tāsām jālaṃ samūhaḥ, tasya saṃvaraṃ saṃvaraṇaṃ gopanam ity arthaḥ (1.5)。なお、この “gopanam” としての “saṃvara” がチベット語の “sdom pa” に相当するということは考えにくい。

本タントラは、*saṃvara* という語を、その 42 章が “saṃvaraṃ sukhavaraṃ matam” (42.40) と定義しているように、基本的には「最高の楽」という意味で用いていると考えられる。なお、*saṃvara* には伝統的に「律義、禁戒」といった意味があるのだが（この意味こそが、チベット語の “sdom pa”

- に相当するものである)、本稿で試訳を試みた 36 章においては、*saṃvara* という語が「最高の楽」であるとともに「律義、禁戒」という伝統的な意味でも強く用いられている。36 章の試訳も見よ。
- (14) 注釈によれば、「真実」とは勝義における空・慈悲結合を指す。
- (15) 注釈によれば、勝義における空・慈悲結合を指す。先程の「真実」と同じ内容を指している。
- (16) 注釈によれば、「このムドラー」とは空のムドラー（別の言い方をすれば、現象世界の女性というムドラー）であり、「食する」とは追い返すことである。つまり、空の観想によって三界の分別を追い払うことを意味する。
- (17) 以上、蘊の清浄さの教示。
- (18) 以上、界の清浄さの教示。
- (19) 以上、処の清浄さの教示。
- (20) この「私」(*aham* = 'ham → ham) は、体内において菩提心を分泌する頭のチャクラ（＝大楽輪）の中央にある文字、すなわち菩提心の体内における起源でもある。「私」という言葉にはこのような生理的瞑想理論も含意していると考えられる。
- (21) テキストでは“*śuddhakāmārtasiddham*”としたが、“*śuddhakāmārtha siddham*”と訂正したい。“*kāmārtha*”が無活用なのは、韻律上の理由によると考えられる。
- (22) テキストの“*mayā*”を“*aham*”とここで解することについては、テキストの Supplementary Note (V) を参照せよ。
- (23) 注釈によれば、ローチャナーなどの 4 人の女神を指す。
- (24) 注釈によれば、ヴァイローチャナなどの仏像を指す。
- (25) 注釈によれば、いわゆる五燈明のこと。牛・馬・象・人・犬の肉。それぞれ五仏に対応する。
- (26) 注釈によれば、世間的な事柄・慣習を指す。
- (27) 注釈によれば、「誓約」はここでは聖なる女性とヨーガ行者の集会を指す。
- (28) 注釈によれば、「5つのヴァルナ」とはバラモン・クシャトリヤ・ヴァイシャ・シュードラ・チャンダーラを指す。なお、この文言は他の文献にも多々登場し、「5つのヴァルナ」が「5つの色」すなわち如来の 5 つの部族を指す場合も多い。
- (29) 注釈によれば、「甘い血」とはアミターバ、「樟脳」とはアモーガシッディ、「赤い」とはラトナサンバヴァ、「白檀」とはヴァイローチャナ、「金剛水」とはアシュクを指す。これは言うまでもなく五甘露の説明であるが、多くの場合、「樟脳」＝精液、「赤い白檀」＝人肉、「金剛水」＝小便、「血」＝経血、そしてこれに大便を加えたものが五甘露とされる。
- (30) これらのムドラーにおけるチョーマーとプラティチョーマー（＝返答のチョーマー）は、互いに対応する箇所であることは容易に理解できよう。
- (31) これらのムドラーにおけるチョーマーとプラティチョーマーもまた、互いに対応する箇所あるいは内容であることが容易に理解できる。
- (32) テキストでは T 写本に従って“*kaṭodam*”としたが、今はチベット訳に従って“*kapola*”に訂正したい。
- (33) テキストでは CT 両写本に従って“*nābhyām*”としたが、今はチベット語の示唆する“*nāsā* [= *nāsāyām*]”を採りたい。“*bhyā*”と“*sā*”は誤写の可能性がある上、この箇所は顔の説明であり、また臍に関する記述は後に登場するからである。
- (34) この「去りながら」(*gacchamānā*) は、文字通りの意味の他に、「迷いの状態から去りつつ」と解釈することもできるのかもしれない。次文の「去り、戻ってこない」も同じ可能性が当てはまる。
- (35) (1) と (2) はチョーマーとそれに対する返答のチョーマー（＝プラティチョーマー）に実際になっている。(3) と (4), (5) と (6), (8) と (9) は、それぞれの内容が対応したものになっている。だがその他のもの（＝(7)(10)(11)(12)）は互いの関連性が薄い。

- (36) テキストの “evam” を、『ダーカールナヴァ・タントラ』に従って今は “eva” と訂正したい。
- (37) テキストの “vāraha” を “varāha” に訂正したい。
- (38) “gandhavāhīnī” を、今は『アビダーノッタローツタラ・タントラ』と『ダーカールナヴァ・タントラ』に従って、T 写本の読みである “gandhavāsini” に訂正した。また、テキストでは Tib に従い “trṣṇā” を暗号語としたが、文脈および *Samputatantra* を参考にして今は “gandhavāsini” の方を暗号語とし、“trṣṇā” をその意味としたい。
- (39) テキストの “dhūmrameghaḥ ‘dhūmrapiyaḥ’ / parvatāḥ ‘sānu’ / ‘sarito’ nadyaḥ” の意味は「“ドゥームラプリヤ”は「煙色の雲」である。“サーヌ”は「山々」である。“サリト”は「数々の川」である」となる。“サーヌ (sānu)” の文字通りの意味は「山頂」「峰」であり、“サリト (sarit)” の文字通りの意味は「川」であるので、それぞれ「山々」「数々の川」とうまく対応するために上記のような編集を行ったのだが、今は『ダーカールナヴァ・タントラ』と *Samputodbhavantra* の見解に従い、テキストを以下のように訂正したい— ‘dhūmra’ meghaḥ / ‘dhūmrapiyaḥ’ parvatāḥ / ‘sānusarito’ nadyaḥ /。この場合、“sānusarito” の文字通りの意味は「峰 [から流れ出た] 数々の川」となる。コラプションの多い『アビダーノッタローツタラ・タントラ』も、この方向で解釈することが可能である。
- (40) 両写本の主張は “āpyakā” だが、今は『ダーカールナヴァ・タントラ』を参考にし、テキストを “āpyakā[→ ayyako]” としたい。
- (41) テキストの Supplementary Note (II) に示した通り、この「言葉のチョーマー」もまた、関連文献内に多少の変動（コラプションはもちろんのこと、ある要素が抜けたり、あるいは順序が代わったり、あるいは元来は暗号語の意味であった単語が暗号語として入れられたり等）があり、その体系は無秩序とは言わないまでも、曖昧な形で書写・伝承され続けたという事情が推測できる。
- (42) ここで述べている 24 聖地群はチャクラサンヴァラ系の様々な文献に登場するのだが、その注釈群はこの「ナガラ地方」を「パータリプトラ」（＝現在のパトナー付近）と見なしている。
- (43) もし、チャクラサンヴァラ系の文献にしばしば説かれる「身体外では川が大地を肥沃にするように、体内内では脈管が爪と歯などを育む」という脈管の定義（この定義については拙稿 “Five Types of Internal Maṇḍala described in the Cakrasaṃvara literature — Somatic Representations of One’s Innate Sacredness —”, 『東洋文化研究所紀要』142, 2004(印刷中) を見よ）がここにも当てはまるならば、この “-vāhā” には「養分を運んで育む」といったニュアンスも意図されていることになる。以下、それぞれの文の「流れる」について同様のことが言える。
- (44) テキストの footnote 3 および Supplementary Note (I) に記したように、もともとは「すべての中で最上 [の数々の場所] に」。
- (45) 注釈によれば、ヴァーラーヒー、ヤーミニー、モーハニー（あるいはモーヒニー）、サンチャーリーニー、チャンディカーである。彼女たちは六族の女主人たちである。
- (46) 注釈によれば、彼女たちはヴァーラーヒー部族。
- (47) 注釈によれば、ヤーミニー部族。
- (48) 注釈によれば、モーヒニー部族。
- (49) 注釈によれば、サンチャーリーニー部族。
- (50) 注釈によれば、サントラーシニー部族。
- (51) 注釈によれば、チャンディカー部族。
- (52) 注釈によれば、ヴァーラーヒー部族。
- (53) 注釈によれば、ヤーミニー部族。
- (54) 注釈によれば、モーヒニー部族。
- (55) 注釈によれば、サンチャーリーニー部族。

- (56) 注釈によれば、サントラーシニー部族。
- (57) 注釈によれば、チャンディカー部族。
- (58) この挿入文の問題については、テキストの footnote 39 を見よ。
- (59) これについては、テキストの footnote 49 を見よ。
- (60) ソーパーラにおける女神および土地の守護者の名前については、テキストの footnote 87, 90 を見よ。もともとはピンターシャが土地の守護者の名前であった。
- (61) 土地の守護者の名前については、テキストの footnote 97 を見よ。
- (62) 土地の守護者の名前については、テキストの footnote 117, 118 を見よ。
- (63) 以上の 24 人の女神たちは、第 24 章で 24 のホーラーの女神たちとしても登場する。
- (64) ヴァーラーヒー、ダーキニー、ラーマー、カンダローハー、ルーピニーを指すと考えられる。
- (65) テキストを、今は『ダーカールナヴァ・タントラ』の記述に従って “pañcaḍākinī mahātattvasarvakāmaprasādhikā” に訂正したい。
- (66) テキストを、今は厳密な韻文ととらずに、また『ダーカールナヴァ・タントラ』を参考にして、“idam vajreśvarīr ājñayāvāhayet sarvāḥ sarvataḥ” と訂正したい。
- (67) 注釈によれば、HA HOḤ HRĪḤ の 3 文字で甘露として加持された食物など。
- (68) テキストの “saṃyujya” を今は “saṃyojya” に訂正したい。
- (69) “tattva” は、ここでは「儀礼」を意味すると考える。
- (70) 注釈によれば、「智慧」とは五智であり、「鉤」とは GO KU DA HA NA (= 5 種の肉) を伴った五甘露。それらがバリ供物の瓶に置かれ、それらが神々を喜ばす。
- (71) “nityasamsthitaḥ” は、意味の上では “nityam samtiṣṭhet” の方が相応しい。したがって、テキストの訂正はしないが、後者のつもりで今は訳すことにする。
- (72) 以下の注で述べるように、注釈はこれを HYAM 字と把握していると考えられるが、おそらく精液としての意義（精液そのものではないとしても）を持ったものであろう。後に記される「仏たちの集合体を」「流す」という表現も、それを示唆している。
- (73) この「五甘露」がこの儀礼においてどのような役割を具体的に果たしているのかは不明である。注釈は何も述べない。後に「大地で供養し」とあるから、供物としての五甘露なのかもしれない。
- (74) 法蔵 (dharmodaya) を意図していると考えられる。注釈は特に説明を加えていない。
- (75) 注釈によれば、YA 字。
- (76) 注釈によれば、RA 字。
- (77) 注釈によれば、HA 字。
- (78) 注釈によれば、すなわち HYAM 字の観想となる。
- (79) 注釈によれば、花などの外的な供物で供養するとする。
- (80) 注釈によれば、流れの女使者が法蔵の中で HYAM 字から生じた、光を放つ身体になると観想することとする。
- (81) “guravā-” は何らかの Corruption であると考えられる。なお、Tib.にはこれに相当する単語が記されていない。あるいは “gauravā-” と同義で使用しているのかもしれない。そうならば、意味は「重要なものとしての親指」となる。
- (82) 注釈によれば、2 本の親指を吸いながら飲むようにすること。
- (83) 注釈によれば、左手。
- (84) 注釈によれば、10 本の指を頭に置くこと。
- (85) テキストの “-tatparaḥ” を、C 写本に従って今は “-tatparam” に訂正したい。
- (86) “samāgatā” は文字通りには「お会いした（：女ヨーガ行者が会われた）」となるが、これは後に落ち合う場所を決める約束であろうから、未来形のように訳した。

- (87) これは、当然タルジャーニー印をイメージしたものだろう。
- (88) 注釈によれば、舌を外に出して動かすこと。
- (89) “mr̥tāsi” (= “mr̥tā + asti”) であるから、これはヨーガ行者が女ヨーガ行者に対して行うジェスチャーであるとも言えるが、実際はその逆も可能だと思われる。
- (90) 注釈によれば、集会の日。
- (91) 注釈によれば、親指で4本の指の関節3つつつ(順番に、人差し指の3関節→中指の3関節→薬指の3関節→小指の3関節→人差し指の3関節=15日分)15の箇所に触って、日数を数える。
- (92) テキストでは“sindhu”としたが、今は“sindhū”に訂正したい。“sindhu”はもともと中性ではない上、アヌスヴァーラは容易に写し落とされ得るからである。
- (93) テキストの footnote 23 を見よ。
- (94) テキストの footnote 24 を見よ。
- (95) テキストの“yogayoginī”の“yoga”は、“yogi”と同義であるところでは考える。なお、“yogayoginī”という表現はチャクラサンヴァラ系の文献にしばしば登場する。
- (96) 注釈によれば、各自の所有財の程度によって、毎日、毎月、毎年、供養すること。
- (97) 注釈によれば、葬場などの特殊な場で蓮華の器を享受するならば、神的なムドラーの成就(=自他利益円満)が生じるということ。
- (98) 注釈によれば、集会の中にいる時に、右手をトリパターカ印にし、左手に五甘露の入った蓮華などの器を持ち、それを味わうということ。なお、注釈は“vibhāvayet”を「観想する」とし、無自性から自身を神の身体であると観想するとする。
- (99) 注釈は“citritam saṃskṛtam”を行者自身に関する記述とし、その意味を、金剛の装飾を作り、自分の頭などに飾っていることとする。
- (100) 注釈によれば、集会の他のヨーガ行者たちにもそれら装飾を与えて飾るべきであるという。
- (101) テキストの“mudrayā karabhūṣitam”は、趣旨としては“mudrayā bhūṣitakaram”。注釈によれば、頭蓋骨の器の環などの他の装飾で身を飾り、般若(ムドラー)の相と結び付いていることを表わす。だが、元来の意図としては、「手にムドラーを飾り」は「手にムドラー(=女性)をつかみ」ということなのだろう。
- (102) この“saṃvara”という語によって、その元来の意味である「戒」とチャクラサンヴァラ系で一般的になる意味である「最高の楽」の双方をここでは表わしていると考えられる。別の言い方をすれば、「最高の楽」が「戒」の実質だと把握されていると考えられる。
- (103) 注釈によれば、般若の蓮華で戯れることにより、歓喜するべきであるという。要するに、「saṃvaraを舞う」とは、性ヨーガをすること。
- (104) 注釈によれば、以上の教示は、毎日や毎月等、上記のような供養を行って戒【としての“最高の楽”】を保持するべきであるという教示。
- (105) 注釈によれば、もし誓約を損なったら、曼荼羅の中で戒【としての“最高の楽”】を得て享受し、続いてそれを損なわない誓いをする。
- (106) 注釈によれば、マントラから生じた女。
- (107) 注釈によれば、俱生の女ヨーガ行者。
- (108) 注釈によれば、爪で裂いたり、掌で攻撃したりすることなど。これは供養ではないとする。
- (109) 注釈によれば、供養で彼女たちに奉仕しないならば、ヨーガ行者は楽から離れるという意味。
- (110) 注釈によれば、ウドウンバラ樹。
- (111) これらが何を具体的に指すかは不明である。「アシュヴァガンダー」は香の一種、「カトゥローヒニー」は何らかの刺激物なのであろうか？注釈は特に説明を与えていない。
- (112) 注釈はナーガケーサラとする。